

# 『大慈恩寺三藏法師伝』鎌倉初期点における漢音形の日本語化

## —院政期点および『蒙求』字音点との比較を通して見る—

佐々木 勇

### 一、問題の設定

本稿の筆者は、先に、『大慈恩寺三藏法師伝』の院政期点と鎌倉期点とを比較し、仮名音注・反切注に比し、声点加点数の減少が著しいことを指摘した。また、その声点から知られる声調には、日本語化を蒙ったと見られるものも存した。これらの点から、漢音声調が日本語化した結果、本来の漢音声調を示す必要性が低下したものと考えられた。<sup>1)</sup>

一方、『大慈恩寺三藏法師伝』では声点が減少していた鎌倉時代においても、『蒙求』『佛母大孔雀明王経』のような字音直読資料では、原則として全漢字に声点が加點されている。このことから、伝統的な漢音声調を伝えるかどうかは、文献により差があることも、同時に知られた。

次に、音形の面でも、訓読資料『大慈恩寺三藏法師伝』は、字音直読資料『蒙求』と相違が存するのかが問題となる。

そこで、本稿では、その音形面での検討を行ないたい。すなわち、漢音形の日本語化においても、訓読資料『大慈恩寺三藏法師伝』は、直読資料『蒙求』と差があるのかどうかを調査する。

### 二、対象資料と調査方法

#### 1. 対象とする訓点

声点における検討と同様に、『大慈恩寺三藏法師伝』の興福寺藏本院政期点と京都大学人文科学研究所藏本鎌倉初期点とを比較する。

それぞれの訓点については、注1論文に述べたので、参照願いたい。

両資料の訓点は、ともに興福寺において、時代を隔てて加點されたものである。

本稿の目的から、ある程度の加點数が必要になる。そこで、

#### 述 (一) (二)

興福寺本では、A種点・C種点・E種点を取り上げる。また、京都大学人文科学研究所本では、全十巻に加點されている一二三年の墨点を対象とする。

以下、これらの訓点に加點年代順に、つぎのように、番号を付す。

- ①興福寺藏本 A種点(一〇八〇年頃点)
- ②興福寺藏本 C種点(一〇九九年点)〈巻七のみ〉
- ③興福寺藏本 E種点(一一一六年点)
- ④京大人文研藏本 墨点(一二三三年点)

### 2. 調査の方法

『蒙求』には、平安中期から江戸期までの諸本の仮名音注を比較した研究がある。<sup>2)</sup>

『蒙求』諸本では、大部分の漢字に加點がなされているため、沼本は、同一本文における同一位置の漢字を比較し、そこに見られる相違点を抜き出し、分析した。佐々木も、資料を追加し、一資料の加點年代を修正した上で、これに就いた。しかし、今、対象とする『大慈恩寺三藏法師伝』の場合、①②③点は、それぞれ本文を異にしている。また、①と④との同一本文を比べても、たとえば、次の通り、仮名音注が加點される漢字は、かならずしも一致しない。

- ①垂<sup>キキョウ</sup>拱<sup>キキョウ</sup>四年二月十五日に仰<sup>キキョウ</sup>止<sup>キキョウ</sup>沙門釈(ノ)彦<sup>キキョウ</sup>
- ②垂<sup>キキョウ</sup>拱<sup>キキョウ</sup>四年二月十五日に仰<sup>キキョウ</sup>止<sup>キキョウ</sup>沙門釈(ノ)彦<sup>キキョウ</sup>
- ③垂<sup>キキョウ</sup>拱<sup>キキョウ</sup>四年二月十五日に仰<sup>キキョウ</sup>止<sup>キキョウ</sup>沙門釈(ノ)彦<sup>キキョウ</sup>
- ④垂<sup>キキョウ</sup>拱<sup>キキョウ</sup>四年二月十五日(三)仰<sup>キキョウ</sup>止<sup>キキョウ</sup>沙門釈(ノ)彦<sup>キキョウ</sup>惊<sup>キキョウ</sup>(ノ)

そこで、同一本文に限らず、対象訓点のすべての仮名音注を比較するという方法を採用した。したがって、比較される漢字音は、同一本文同一箇所のものである場合もあるし、そうでない場合もある。なお、梵語音写字への音注は、除外する。

### 三、調査結果

目的は、『大慈恩寺三藏法師伝』において、院政期点と鎌倉期点との相違を記述し、それを字音直読資料『蒙求』諸本の実態と比較することである。

興福寺本『大慈恩寺三藏法師伝』院政期点については、築島裕の詳細な記述・研究がある。興福寺本①②③点について、筆者も調査したが、筆者の調べは、すべて築島の記述と一致する。そのため、①②③点については、公刊されている築島の著書を引く。

以下、字音についての調査結果が公表されていない、京都大学人文科学研究所『大慈恩寺三蔵法師伝』一二三三年点の実態を記し、その後、『大慈恩寺三蔵法師伝』院政期点および『蒙求』諸点の実態と比較する。なお、吳音形の混入例は除外し、挙例にあたって、必要と思われる箇所以外では、声点の記述を省略する。

1. 頭子音

A. ア・ワ二行の混同

(1) イ列音

a. 開口字

以下、用例を「当該字 仮名音注(用例・所在(八巻行数))」の形式で掲げる。

- |                  |               |
|------------------|---------------|
| 乙 イツ(乙未・六134)    | 茵 イン(重茵・二78)  |
| 胤 イン(胤・五370)     | 殷 イム(殷稠・四134) |
| 殷 イン(殷勤・一35・350) | 噫 イツ(鳴噫・五236) |
| 噫 イツ(鳴噫・五236)    | 右 イウ(守右・七50)  |
| 有 イウ(郭有道・一57)    | 有 イウ(有司・六8)   |
| 圃 イウ(楽圃・六140)    | 祐 イウ(祐・一32)   |
| 猷 イウ(風猷・一30)     | 祐 イウ(乾祐・六7)   |

など、八二例がイとされる。

ただ一例、「感應」(七13)の例で、「應」に「キヨウ」の加點があるのが例外である。「應」は、「蒙求」長承点鎌倉後期点においても「キヨウ」と加點されている。同小韻字の「鷹」も、「蒙求」諸本および『文鏡秘府論』一二三八年点で、「キ

ヨウ」とされるものである。よって、日本漢音として「キヨウ」形が認められていたものと考えられる。

b. 合口字

- |              |               |
|--------------|---------------|
| 維 牛(四維・十248) | 韻 牛(訛韻・八202)  |
| 韻 牛(儀韻・六187) | 韻 牛(韻ヲ・七38)   |
| 委 牛(充委・六210) | 慰 牛(慰諭シ・三425) |
| 慰 牛(慰慶・五36)  | 慰 牛(迎慰・六47)   |
| 慰 牛(慰問・二77)  | 殞 牛(殞絶・一255)  |
| 遺 牛(遺編・一27)  | 遺 牛(遺闕・一37)   |
- など、イ列音合口字は、原則としてキで表記される(全三六例)。

しかし、つぎのように、イとされる例が四例存する。

- |                |               |
|----------------|---------------|
| 維 イ(網維タリ・七146) | 韻 イン(風韻・四204) |
| 委 イ(委頓・九146)   | 尉 イ(授尉・一217)  |

これらは、右に掲げたとおり、同一字または中国中古音の同音字がキとされる例を持つ。

逆に、開口字をキとする例は無かったから、合口字をイとする右四例は、単なる誤写とは考えられない。発音における合口性消失を意味するものであろう。

『大慈恩寺三蔵法師伝』院政期点には、合口字をイとする例は、無い(築島著書 研究篇、一三三三頁)。また、『蒙求』諸本においては、このような例は、鎌倉後期の道順書写本ではじめて見られるものである。

『大慈恩寺三蔵法師伝』一二三三年点の例は、早すぎるようにも思われる。しかし、類例として、『古文孝経』建治三年(一二七七)点、『弘決外典抄』弘安七年(一二八四)写本の例が指摘されている。右四例は、それらのはやい例かと思われる。

(2) エ列音

a. 開口字

開口字の頭音をエとした例は、無い。エ列音開口字は、左の例など、全七六例がエとされる。

- |               |               |
|---------------|---------------|
| 映 エイ(澄映・三124) | 英 エイ(伯英・九112) |
| 瀛 エイ(瀛州・七207) | 楹 エイ(彫楹・三272) |
| 盈 エイ(害盈・九371) | 易 エキ(貿易・二18)  |
| 掖 エキ(張掖・六143) | 駅 エキ(駅・六7)    |
| 咽 エツ(嗚咽・二120) |               |

b. 合口字

合口字をエとした例に、次の二例がある。

- |               |               |
|---------------|---------------|
| 越 エツ(戰越・九235) | 宛 エム(宛然・二300) |
|---------------|---------------|

その他、韻鏡四等字をエとする諸字(菅・叡・銳・睿・濬・役・閔・悦)がある。しかし、これらは、つとに指摘されているとおり、日本漢音が韻鏡四等字の合口性の弱化を反映したものであり、当初からエであったと考えられる。

合口字をエとするものは、次の例をはじめとして、全一

八例である。

- |                |               |
|----------------|---------------|
| 泳 エイ(游泳ス・二154) | 衛 エイ(侍衛・九266) |
| 衛 エイ(衛立セリ・二75) | 猿 エン(心猿・九394) |
| 遠 エン(遠邇・一36)   | 椀 エン(鍾椀・二82)  |
| 援 エン(情援・九383)  |               |

以上、要するに、前代の字音仮名遣いに相違するのは、合口字をエとする「越エツ・宛エム」の二例のみである。『大慈恩寺三蔵法師伝』院政期点では、両者を混じたと見られる例は、無い(築島著書、一三三五頁)。

『蒙求』字音点との比較は、ともに例数が少なく困難である。同程度と見られようか。

(3) オ列音

a. 開口字

- |                |                  |
|----------------|------------------|
| 鄔 ヲ(鄔・一330)    | 烏 ヲ(曉烏・八307)     |
| 烏 ヲウ(揚烏・一63)   | 鳴 ヲ(嗚咽・一310以下五例) |
| 雄 ヲウ(雄猛・五158)  | 舅 ヲウ(舅氏・四142)    |
| 沃 ヲク(良沃ト・三155) | 闇 ヲン(闇林・二406)    |

b. 合口字

- |               |               |
|---------------|---------------|
| 温 ヲン(温清・一67)  | 温 ヲム(温樹・九305) |
| 質 ヲン(質管・九345) |               |

以上、開口字・合口字ともに、ヲーのみである。和語の音韻としては、o・woの区別は、一〇〇〇年頃に失

われたとするのが、通説である。しかし、字音としては、しばらく両者が区別されたい。『大慈恩寺三藏法師伝』院政期点では、原則として区別されている(築島著書 二二三頁)。それが、いつから同一となるかは不明である。少なくとも、一二三三年加点の時点には、区別が無い。『蒙求』諸本においても、鎌倉中期以降は、両者の区別が見られない。

## 2. 韻

### A. 合拗音の消滅

#### (1) ア列合拗音

『大慈恩寺三藏法師伝』院政期点では、「宏・禍」等は、「火・クワ」と加点される。『蒙求』諸本でも、「クワ」型で統一されている。

『大慈恩寺三藏法師伝』一二三三年点においても、

宏クワウ(宏遠・六248) 宏クワウ(八宏・一106)  
宏クワウ(宏瞻ナリ・二347) 宏クワウ(宏壯・四85)  
禍クワ(禍乱・六203) 寡クワ(寡徳・一295、以下二例)  
怪クワイ(嗟怪・三50) 華クワ(嵩華・七18、以下二例)  
魁クワイ(魁梧・二390) 悔クワイ(慙悔・五140、以下二例)  
魁クワイ(魁傑ナリ・一102) 廓クワク(廓然トシテ・一145、以下二例) 郭クワク(郭有道・一57、以下三例)。  
など、八五例は「クワ」または「火」とされており、中心的な表記は、同期の資料と変わらない。  
しかし、『大慈恩寺三藏法師伝』一二三三年点には、次の

例がある。

宏カウ(宏遠・四197) 宏カウ(八宏・六203)  
卦カウ(八卦・九88) 濬カン(濬海・六216)

「クワ」を「カ」とする右例は、単純な誤写とは考えられない。

有名な「ケンチカンネン(建治元年)」「阿豆河庄上村百姓等言上状」の例をはじめ、『往生要集』一一八一年写本にも、「いんか(因果)」等の類例が指摘されている。

よって、少数例ではあるが、『大慈恩寺三藏法師伝』④点の右例は、訓点資料における早期の直音化表記例であると考えられる。

#### (2) イ列合拗音

##### a. 歯音字

率シユツ(率土・九175) 率シユツ・ソ(率略・九31)  
淳シユム(淳政・六206) 淳シユン(淳和・一345)  
淳シユン(淳風・六54) 侑シユン(辞閏反(侑)・八94)  
駿シユン(駿・一32) 駿シユン(八駿・九42)  
楯シユン(矛楯・八58) 潤シユン(靈潤・六100)  
純シユン(純粹・八24) 遵シユン(王遵・二169)  
浚シユン(浚谷・九103) 詢シユン(諮詢・一341)  
濬スウン(明濬・八238) 率スツ・七反(率由・九16)  
峻スン(峻峭・三285)

右が全例である。見られるとおり、大部分が「シユツ・シユ

ン」であり、「スウン・スツ・スン」が各一例存する。  
『大慈恩寺三藏法師伝』院政期点では、次のように多様である。

- ① A種点―春・スチ
- ② C種点―主ツ・主キチ・主ン・寸・シキチ
- ③ E種点―春

一方、『蒙求』諸本では、右の他、鎌倉中期までは、「スキ  
ン・スキツ・シツ」の形が存する。『蒙求』諸本では、「スキ」  
型が見られなくなり「シユ」型に統一されるのは、室町時代  
以降である(国会図書館蔵「重新點校附音増注蒙求」応永七  
年(一四〇〇)頃点でもなお、「スイン」の例が一例存する)。  
よって、『大慈恩寺三藏法師伝』においては、表記の統一  
が『蒙求』諸本よりも早い。合口介母の発音を早期に放棄し  
たということである。

### b. 牙喉音字

以下の諸字は、前代までクキ―と表記されたものである。  
本資料にも、次のとおり、その例が多い。

拱クキヨウ(垂拱・七69・一2・七16)  
拱クキヨウ(端拱・九183)  
危クキ(艱危・五427・二165・十241)  
危クキ(危陰・二322) 徽クキ(清徽・九398・十270)  
輝クキ(輝賁・九419) 輝クキ(貞輝・八301)  
偽クキ(偽曆・十264) 匱クキ(金匱・七17)

弁クキ(弁服・六209) 毀クキ(頹毀シタリ・三84)  
狂クキヤウ(狂豕・四347)  
訓クキ(訓・九96) など四六例。

しかし、キと表記する例が、三例存する。

拱キヨウ(垂拱・九45) 拱キヨウ(端拱・三281)  
玉キヨク(桑玉・二167)

クキ―と加点された例と同一字・同一語のものがあり、両  
者が別音であったとは考えられない。「拱・玉」については、  
直音化した発音がなされたものであろう。あるいは、「クキ  
ヨウ」「クキヨク」のように、長い音形のものから、合口性  
が失われたものかもしれない。

『大慈恩寺三藏法師伝』院政期点には、これらを「キ」と  
する例は、存しない。

『蒙求』諸本では、鎌倉時代中期から後期加点本に一例の  
キ表記が見られる。

したがって、この事象も、京都大学人文科学研究所本『大  
慈恩寺三藏法師伝』④点の方が、直音化が早い。

### c. 舌音字

墜ツイ(墜露・七33) 鈍ツイ(鈍鑿・五97)  
右の例のみである。『蒙求』古点に見られた「チキユイ・ツ  
キチ」のように、合口介音を表示しようとした表記例は、本  
資料には無い。『蒙求』諸本がツイで統一されるのは、室町  
時代以降である。



ム表記	ン表記	計
m 韻尾字	五三	六一
n 韻尾字	五三	三七五
計	一〇六	四三六
		五四三

周知のとおり、中国原音 m 韻尾をムで、n 韻尾をンで書く方式が院政期に定着する。

『大慈恩寺三藏法師伝』院政期点では、原則として、m、n、ンとして区別している(築島著書、一八八頁)。

右の一二三三年点でも、ム表記例は、中国原音 n 韻尾字よりは m 韻尾字に高率である。しかし、例に掲げたとおり、同一字・同一語にム・ン両様の加点がなされているのであり、m・n 韻尾が音として区別されていたとは考えられない。m 韻尾字にム表記例が多いことが偶然でないと思えば、かつての表記法をとどめたものであろう。

よって、③E種点一一一六年点から、④一二三三年点の間に、m・n の区別がされなくなったことになる。

『蒙求』諸本では、鎌倉初期は、混乱しつつも区別を保っていたと考えられる。よって、この事象も、『大慈恩寺三藏法師伝』の方が統一が早い。

B. 唇内入声の母音ウへの合流

(1) 唇内入声の表記(促音化例は後掲)

フ表記—一五例  
 楫<sup>シ</sup>セフ(舟楫・一三三) 狎<sup>カウ</sup>アフ(行狎・九一〇)

(2) 唇内入声字以外の韻尾フ表記

- [東韻] 雄イフ(驍雄ニシテ・五三二)
- [鍾韻] 勇イフ(勇武・五三六)
- [豪韻] 号カフ(悲号・二五八)
- [陽韻] 爽<sup>サフ</sup>(英爽ナリ・二一五)
- [尤韻] 右<sup>イフ</sup>(右武侯・六五) 西イフ(丁酉・六六)
- 猷<sup>イフ</sup>(朝猷・六九二) 猷イフ(大猷・六五九)
- 猷イフ(帝猷・九三)
- 有イフ(有・一三六)
- 祐<sup>イフ</sup>(納祐・九二五) 牖<sup>イフ</sup>(牖・三二七)

なお、唇内入声字以外の韻尾フ表記例は、『大慈恩寺三藏法師伝』院政期点にも、存疑例以外に、次のものがある。

- ①A点 條<sup>テフ</sup>(一一五) 僚<sup>レフ</sup>(二七)
- ③E点 戎<sup>シフ</sup>(五一〇)

これは、唇内入声の母音ウへの合流が定着したために生じる現象である。

しかし、『蒙求』諸本では、鎌倉中・後期点と鎌倉後期点とに一例ずつ、唇内入声以外の字の韻尾フ表記が存するのみである。

よって、唇内入声の母音ウへの合流も、『蒙求』より、『大慈恩寺三藏法師伝』古点の方が早かったと考えられる。

C. 入声韻尾の促音化表記例

唇内入声(下接字と共に用例の訓点を掲げる)

決ケフ(決辰・九四) 邑イフ(三邑・三三七以下五例)  
 峽<sup>カフ</sup>(峽陋・九三) 岌<sup>キウ</sup>イフ(岌岌・五一一)  
 劫<sup>ケフ</sup>(退劫・九三) など  
 ウ表記—三〇例

襲<sup>シウ</sup>(襲・二九三) 葉<sup>エウ</sup>(葉語・一三二)  
 艶<sup>テウ</sup>(艶工・五三六、以下五例) 納<sup>ノウ</sup>(納祐・九二五)  
 決<sup>セウ</sup>(決辰ナラズ・七四) 什<sup>シウ</sup>(讖什・一三三)  
 急<sup>キウ</sup>(拘急・三二七、以下三例) 合<sup>カウ</sup>(合極・六〇四)  
 岌<sup>キウ</sup>イフ(岌岌・五一一) 獵<sup>レウ</sup>(施獵・三三)

涉<sup>セウ</sup>(利涉・一三三、以下三例) 吸<sup>キウ</sup>(呼吸・九三)  
 甲<sup>カウ</sup>(甲子・六二四、以下二例)  
 給<sup>キウ</sup>(内給事・九七) など

『大慈恩寺三藏法師伝』一二三三年点では、唇内入声字は、前代に定着したフ表記例よりも、ウ表記例が多い。さらに、入声点以外の声点加例が存する(波線を引いた例)。

本点の右の状況は、唇内入声韻尾が開音節化していたことを示す。(入声点は、前代の表記法を踏襲したに過ぎないものであろう)。  
 興福寺藏『大慈恩寺三藏法師伝』院政期点では、②C点とD点とに二例ずつの唇内入声ウ表記が存するのみである(築島著書、二二三—二四頁)。また、右の④点の実態は、『蒙求』諸本では、鎌倉後期以降のものに相当する。  
 さらに、次に掲げるように、唇内入声字以外をフで書く例もある。

ツ表記  
 揖<sup>シテ</sup>(二四二・四二六) 挾<sup>カ</sup>帯<sup>シテ</sup>(七五)  
 接<sup>ス</sup>(三一九) 鏝<sup>腹</sup>(四四・七三)  
 合<sup>壁</sup>(八九七)  
 喉内入声  
 ツ表記 屬<sup>シ</sup>(一三二)  
 零表記 弱冠<sup>(四一〇)</sup> 陟<sup>記</sup>(七五三) 博<sup>瞻</sup>(四一八)

舌内入声  
 ン表記 頤<sup>シ</sup>(七三)

零表記 牽<sup>一</sup>渾<sup>一</sup>(一八二)  
 促音をツ・チで表記する例は、院政期・鎌倉初期訓点資料には、ほとんど報告が無い。字音直読資料においても、鎌倉時代後半期になって例がはじめて見られる。

『蒙求』における初出例も、鎌倉中期・後期の加點になる東洋文庫本である。  
 このような状況の中で、一二三三年加點の本資料に右の例を指摘できることは、注目すべきである。これも、本資料が字音直読資料『蒙求』に先行する点である。

四、考察

以上、漢音形の日本語化においても、訓読資料『大慈恩寺三藏法師伝』は、字音直読資料『蒙求』に先行するの否かを調査することを目的とし、実態を記述してきた。

『蒙求』諸本において院政期から鎌倉期にかけて日本語化が生じた事象について主に調査した結果、『大慈恩寺三蔵法師伝』古点の字音は、総じて、『蒙求』よりも日本語化の時期が早いことが知られた。

かつて行なつた声点の分析から、『大慈恩寺三蔵法師伝』一二三三年点の漢音声調は、『蒙求』と比較して、より日本語化されたものであることが知られていた。

この度、音形についての調査によつても、声調と同様な結果が得られた。音形と声調とは、発音された一つの音の別要素なのであるから、当然の帰結である。

また、時期の遅速の問題ではなく、質的な相違かと思われる点が生じた。

たとえば、イ列合拗音歯音字が「シユ」型で統一される事は、統一の時期に『大慈恩寺三蔵法師伝』古点と『蒙求』古点とに大きな開きがあつたばかりでなく、『大慈恩寺三蔵法師伝』古点では、院政期点においても、『蒙求』に見られた「スハ」型の表記を指摘できない。

築島裕『興福寺蔵大慈恩寺三蔵法師伝の国語学的研究 研究篇』は、『大慈恩寺三蔵法師伝』院政期点の字音をつぎのように捉えている。

概見した所、蒙求や文鏡秘府論は相当に正確な漢音の体系を示してゐるやうで、百姓読の類も少く、本点はその面でこれらとは聊か性格を異にする資料と認むべきであらう。(一五二頁)

興福寺本にも、呉音の混入が有り、唇内入声以外の韻尾をフとすること・韻尾無表記・誤写などがある。(一五五頁)

『大慈恩寺三蔵法師伝』一二三三年点も同様に、誤写・音符による推読・字音仮名遣いに合わない例が多い。また、このたび問題としなかつたが、呉音の混入も比較的多い。

漢字音が外来語音としての異質性を失つていない時代には、同一時代・同一地域においても、さまざまな音形・アクセントで、音読されていたものであろう。このことは、現代日本語における外来語の発音から容易に推測される。

本稿の検討から知られるとおり、今後、日本漢字音史は、単一の線ではなく、幅をもつたものとして描かれなければならない。それによつてはじめて、漢字音と日本語音との関係が明らかになるはずである。

注

(1) 佐々木勇「日本漢音声調の必要性の低下について——院政期と鎌倉期の『大慈恩寺三蔵法師伝』訓読資料を比較して——」(『国語国文』第71巻第2号、二〇〇二年二月)。

(2) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武蔵野書院)、佐々木勇『蒙求』字音点に見られる日本漢音の変遷——鎌倉時代を中心として——(『国文学攷』第一二二号、一九八九年三月)。

(3) 馬淵和夫『国語音韻論』(一九七一年、笠間書院)、六〇

頁。

(4) 有坂秀世「唇牙喉音四等に於ける合口性の弱化傾向について」(『音声学協会会報』第六二・六三号、一九四〇年三月)。後、『国語音韻史の研究』所収。参照。

(5) 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」(『広島大学文学部紀要』特輯号3、一九七一年三月)。

(6) 四等合口字「規・窺・季・悸」等は、日本漢音では古くから「キ」とされるため、ここでは問題としない。また、クヤウ・クヨクの例が存在する。これらは、クキヤウ・クキヨクと同音を表記したものと考えられる。『大慈恩寺三蔵法師伝』院政期点にも、同様な表記が見られる。

(7) 注5小林論文、等参照。

(8) なお、『蒙求』では、室町時代以降の写本に、かつてiヤウと仮名書きされていた陽韻字をiヨウ・eウと書く例が見られる。そのような例は、『大慈恩寺三蔵法師伝』一二三三年点には、無い。

(9) ④一二三三年点には、m・n韻尾字に、次のような表記例も見られる。

ウ表記

芬 ハウ(芬を・九37) 群 クウ(群賢・六192)

倫 リウ(杜正倫・八255)

イ表記

犬 ケイ(犬羊・一49) 軒 ケイ(軒陸・五43)

零表記

申 シ (壬申・七176) 汾 フ (汾晋・一291)

禁 キ (防禁・一156)

これらは、単なる誤写・脱字かもしれない。しかし、m・nの閉鎖性が弱化・消失する場合があります、それを示している可能性がある。

(10) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武蔵野書院)一〇八四頁、参照。

〔付記〕大橋勝男先生は、わたくしが広島大学大学院に進むとき、「これからだね」とおっしゃってくださいました。今、右の拙文をご覧になり、同じことをおっしゃるに違いありません。

(広島大学教育学研究科)